

源氏物語 ～紫の上の研究～

国語班 片岡佳奈 黒川舞 高垣志菜 長岡裕子

1. はじめに

わたしたち国語班は、古典文学の研究をするにあたって、「恋愛」にジャンルを絞り、特に有名な作品『源氏物語』の登場人物たちに焦点をあてた。

主人公・光源氏を取り巻く数多くの女性たちの中でも、最も長く連れ添った「紫の上」という女性について、なぜ浮気者の光源氏にもこんなに長く愛されたのか、彼女の魅力について考察した。

2. 源氏物語の概要

- ・全54帖で構成され、基本的に各帖でそれぞれ違う女性と、光源氏との恋が書かれる。（後半は光源氏の死後の話）
- ・約800首の和歌が詠まれている。
- ・時代を超えてたくさんの人に読まれている、平安時代を舞台にした長編恋愛小説である。

3. 紫の上の人物像

- ・才能に溢れ、気品ある女性であった。
- ・光源氏の憧れの女性、藤壺に瓜二つであった。
- ・聞き分けが良い反面、嫉妬深い一面もあった。
- ・子供好きであった。
- ・光源氏にとって身近な女性であった。
- ・可愛らしい素敵な女性であった。
- ・情緒を解し、懐の深さも持っていた。

↓

少し嫉妬深い所が欠点であったが、美貌や和歌の才能に恵まれた魅力的な女性でその様子は‘らうたげなり’などの言葉で表現されている。

4. 他の女性との比較

(1) 藤壺、紫の上に似ている“女三宮”

容姿は似通っていたが、幼稚で和歌も巧くなかったため、紫の上のほうが愛されていたと推測した。

(2) 上品な淑女“六条御息所”

和歌が巧みで、落ち着いた大人の女性であったが、嫉妬深すぎる一面があった。一方、紫の上は嫉妬と、上手く付き合っていた。

(3) 光源氏との間に娘をもうけた“明石の君”

紫の上が望んでも手に入らなかった子供を産み、光源氏にも大切にされていたが、身分が低かった。

(4) 憧れのひと“藤壺”

光源氏の父である帝の妃で、義理の母であったため、手が届かない存在であった。

紫の上はいつもそばにいる、身近な女性だった。

5. 考察

私たちは、原文を読み、独自の解釈をしたりして源氏物語を掘り下げてきた。それに際し、紫の上に比べてほかの女性たちは欠点を意識して描写されていると考えた。これは紫の上が光源氏にとって最愛の女性であったことを際立たせるためであると思われる。いくつかの文献を参照してみると、紫の上は光源氏にとって藤壺のかわりであるとするものもあるが、研究してみて私たちは紫の上が光源氏の最愛の妻であると考えた。

6. 参考文献

- ・阿部 秋生 今井 源衛 秋山 虔 鈴木 日出男
『新編日本古典文学全集 源氏物語』(1)～(4) (小学館)
- ・大和 和紀『あさきゆめみし』(1)～(7) (講談社漫画文庫)
- ・小泉 吉宏『まる、ん？大掘源氏物語』(幻冬舎)
- ・秋山 虔『源氏物語の女性たち』(小学館ライブラリー)
- ・井筒 雅風 中西 進 樺島 忠夫『新国語総合ガイド』(京都書房)
- ・安西 剛『絵で読む古典シリーズ源氏物語』(学習研究社)
- ・NHK 名古屋「よみがえる源氏物語絵巻」取材班『よみがえる源氏物語絵巻』(NHK 出版)